

幼子に福音を示される神

マタイ 11 : 25 - 26



司祭 ヨハネ 井田 泉

2014 年 7 月 6 日
聖霊降臨後第 4 主日

奈良基督教会にて

「そのとき、イエスはこう言われた。『天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。』」

マタイ 11:25

今、イエスは感動しておられます。感動が祈りとなりました。
「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。」

何があったのか。それはほとんど何も書かれていないのですが、はっきりわかることがあります。それは、イエスが幼子と出会われた、ということです。

新共同訳は「幼子のような者」と訳してあるので、わたしは長い間、これは広い意味で「幼子のような者」とイエスと言われたのだと思い込んでいました。ところが調べて見ると原文は「幼子のような者」ではなくて、はっきり単純端的に「幼子」（ネーピオス）と書いてあるのです。

同じことを伝えているルカ福音書は、もっとイエスの感情のあふれを伝えています。

「そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。『天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子（のような者）にお示しになりました。』」ルカ 10:21

イエスは幼子を見て、幼子と出会って、感動して、その感動

が神への賛美となってほとばしり出た。なぜなら、その幼子の中に神さまが生きておられることを感じられたからです。

このようにこの箇所を理解するのは、わたし自身があるとき、そのような経験をしたからです。

いくらかわたし自身の経験をお話しします。

40 年近く前、わたしは神学生でした。その神学生時代に確信していたことは、教会は幼稚園をすべきではない、ということでした。いや、幼稚園をするのはよいとして、牧師がそれに関わって時間とエネルギーを割くようなことは断じてすべきではない、ということでした。牧師はみ言葉の宣教に力を注ぐべきだと。

ところが卒業して最初に派遣されたのは、下鴨キリスト教会で、しっかり幼稚園がありました。しかも、いきなり事務職兼「主事」という名の園長代理。わたしの考えと違うのですけれども、そこに置かれたら必死でやらなくてはなりません。

毎週の子どもたちの礼拝ではお話をしなければなりません。子どもに通じるようにお話を準備するのは非常にむづかしい。ともかくも原稿を書いて、そしてひとりで声を出してリハーサルするのです。するといいよどむ。いかにもむづかしい言い方で、これではダメだと思う。そんなことで毎回大汗をかきながら幼稚園の礼拝をしはじめたのでした。事務の仕事も困惑の連続でした。当時わたしは 27 歳でした。

それから東京に出向して 18 年過ごし、その間にはもっぱら学生相手、大人相手でした。神学校で教師をしているあいだに、近

所の子どもを集めて月1回日曜学校をしたりすることはありましたが、幼稚園との関わりはまったくありませんでした。

14 年前に京都教区に戻ってくると、行く先々に幼稚園があります。復活幼稚園、聖三一幼稚園、そして奈良は親愛幼稚園です。わたしの神学生時代の確信と正反対の現実です。

現実とはともかくも、変わらない思いがあります。それは、牧師、教役者は礼拝を中心に生きるべきだ、ということです。聖職として託されていることを働きの中心に据えているべきだ、ということです。

けれども神学生時代と変わったことがあります。それは、幼児教育は神さまの働きだ、と確信したことです。そしてさらに言うなら、子どもたちの中に神さまが働いておられるのを経験して感動することがある、ということです。

子どもたち、とくに幼稚園の礼拝でお話しするのはむづかしい。もう合わせて 18 年もしているのですが、うまく行く場合もあればうまく行かない場合もある。準備がちゃんとできなかったとか、祈りが足りなかったとか、しばしば反省します。

ところが子どもたちと接しているとき、思いがけない言葉を聞くことがあります。保育室で一緒に給食を食べていると、隣に座った子が、「園長先生、神さまのお話しして」とせがんでくる。食べながらはむづかしい。「ある町にヤイロさんというお父さんがいて……」 何とかひとつ終わると、「次は？」と言われ

る。そのうちに時間切れになってしまいました。

わたしは週に2回、正門のところに立って園児を出迎えます。登園する子どもとひとりひとりタッチします。中には逃げる子どももいます。

ある日、ふだんあまり喜んでタッチしないなあと思っていたある男の子と、たまたま庭で一緒になったとき、「園長先生、お礼拝ありがとうございます」と言われてびっくりしました。それが2度ありました。この前は「お祈りしてくれてありがとうございます」と言われました。

今、教会の門の両側に七夕の飾りが立てられています。通りから教会に向かって立って右側に、園児たちの願いが書いた短冊がたくさんかかっています。

ある朝、女の子が登園してきました。「わたしのがある」と言って指さすので、一緒に見上げてどれかと探しました。「大きくなったらケーキやさんになれますように」とか、「おうたをいっぱい歌えますように」とか、ほほえましいのがたくさんあるのですが、その子はどれかとさがすと、やっと見つかった。その子を書いたのは「世界じゅうのひとがみんなしあわせになれるように」という言葉でした。

思いがけないところで、神さまが働いておられる。感動します。キリスト教幼稚園をされていてよかった、と思います。神さまがここで「平和の子」を、平和をつくりだす子どもたちを育んでいくのださる。

幼稚園は、神さまがこの教会に託された大切な働きのひとつ

です。祈って支えてくださいますようお願いします。

「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。」

イエスさまは子どもたちと接して、わたしよりももっともつと深く感動されたにちがいありません。天地の主である神が、幼い子どもたちの中に生きておられる。

イエスさまは苦勞されました。人びとの頑なさ、高慢、次第に強まってくる、力ある人たちの反感と迫害。知恵ある者や賢い者が自分の知恵と賢さを誇っているとき、神さまはご自分を隠してしまわれる。しかし幼子に、神さまはご自分とその福音を示されるのです。

ふと思い出した聖書の言葉があります。

**「ただし見よ、見いだしたことがある。神は人間をまっすぐに造られたが
人間は複雑な考え方をしたがる、ということ。」**

コヘレトの言葉 7:29

わたしたちはあまりに複雑になってしまったかもしれません。

あまりにむつかしく考えてしまう。自分と人のマイナスをあまりに見てしまう。あらゆることがむつかしくなり、わたしたちは悲観的になる。

けれども今、わたしたちは幼子と触れて感動されたイエス、そのゆえに神を賛美されたイエスのそばに來ています。

「そのとき、イエスはこう言われた。『天地の主である父よ』」

なにがあろうと、神は天地の主なのです。天と地の一切を造り、それを保っておられる主、愛の父なのです。この方がわたしたちを保っていてくださいます。わたしたちも、イエスとともに目を上げて祈ります。

「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます」

イエスとともに神を喜び、神をほめたたえるうちに、わたしたちは幼子の単純さを取り戻してゆきます。賛美の祈りの中で、神はわたしたちのうちに働かれて、本来のわたしを回復してくださいます。

コヘレトが語ったように、神がまっすぐに造られた本来のわたし。神の息吹を受けたわたし。神さまの前に単純で素朴であるわたしが回復されます。

すでに大人になっている皆さん一人ひとりの中に、わたしの中に、実は幼子がいます。神さまはわたしの中にある大切な幼子をご覧になります。わたしの中の幼子に、神さまは福音を示してくださいます。

神さま、イエスさまの賛美に触れて、わたしたちもあなたを賛美する者とならせてください。複雑になってしまったわたしたちを、あなたの前に単純にしてください。あなたの純粋で素朴な子どもを、わたしたちのうちに回復してください。幼稚園と日曜学校をとおして、平和の子らを育ててください。この子らが戦争で傷ついたり傷つけたりすることがないようにしてください。主のみ名によってお願いいたします。アーメン